

### 「中世の面影を残す緑豊かな町ミュンヘン」

ヨーロッパのほぼ中央に位置するミュンヘン。街の中心部にはアルプスを源流とするイザール川が南北に流れ、南方のアルプスに至る地域には多くの美しい森や湖があり、中世の古い街並みを美しく際立たせている。市内にはエングリッシュガルテンをはじめ緑豊かな公園やスポーツ施設が点在し、市民の憩いの場になっている。



### 「ドイツに生活するよさを生かして」



2003年1月、地元日本人会の努力とバイエルン州政府、日本政府の多大な援助により、ミュンヘン日本人国際学校の新校舎が完成した。創立10年の節目に、それまでの賃貸オフィスビルの校舎から移転し、新しいスタートを切った。

児童・生徒数121人（小106 中15）〔平成17年3月現在〕で、人数は年々増加傾向にある。同校は文部科学省認可の在外教育施設であるとともにドイツバイエルン州の認可を受けた現地の私立学校でもある。教育課程は日本の学習指導要領によるものだが、バイエルン州文部省の示す基準も満たす必要がある。そのため、小学部は週6時間のドイツ語、中学部は週4時間のドイツ語と2時間の英会話を行っている。そのことが学校の大きな特色の一つにもなっており、外国語教育と国際理解教育の充実を図っている。ドイツにある学校という特色を生かし、ドイツ語学習や英語学習を活用しながら児童・生徒が主体的に学べるよう、体験的な内容を取り入れた学習活動を展開している。

### 【アルテンハイム（お年寄りの福祉施設）訪問】



小学部3・4年生がお年寄りの福祉施設を訪問し、ドイツ語の劇や歌の発表を見ていただいたり、折り紙やあやとりと一緒に遊んだりしながら交流を深める。

ドイツ語の授業時間に、あいさつの仕方や折り紙の折り方などの表現方法を学習し、実際の場で会話をした。交流前は、自分が話すドイツ語が伝わるかどうか不安を抱いていたが、アルテンハイムの皆さんはしっかりと聞いて下さり、言葉を返して下さいだったので子どもたちもより意欲的に活動することができた。

### 【現地校との交流】



小学部は現地の小学校と、中学部はインターナショナル校との交流を行っている。学校全体の交流ではなく、学級単位の交流を行っている。

日本人学校での交流は習字や料理を通して主に日本の文化を伝えるもの。現地校での交流はスポーツや絵を描く活動などを中心にした。事前にお互いの学

校の担当教員が交流のねらいや方法を話し合い、年間を通して継続的に行えるようにしている。

交流を計画するに当たって苦労したのは、実施日の設定。日本人学校は4月に新学年がスタートするが、現地では9月スタート。そのため、交流会を実施できる時期がなかなか一致しないことや学級のメンバーや担当が替わるタイミングが違うため、交流を継続するためにはお互いに定期的に連絡をとっておくことが必要だった。日本人学校の派遣教員は短期間で入れ替わるので、ドイツ語教員や現地採用教員とのミーティングも不可欠である。

## 【校外学習（調べ学習）】



学年単位あるいは隣接2学年単位の児童が社会科の学習で、マルクト（市場）や警察署、消防署などに調べ学習に行ったり、現地理解学習の一環で祭（フリーリングフェスト・オクトーバーフェスト等）の会場見学に出かけたりしている。見学前にドイツの消防や警察の仕組みを勉強したり、ドイツ語での質問の仕方を練習したりして見学活動を充実させている。

それぞれの施設の方や街の人々はたいへん親切で、質問に丁寧に答えてもらえるので、子どもたちは校外学習を楽しみにしている。各学年の発達段階に応じて、あいさつの仕方や見学のマナーなどをきちんと指導しておくことも、校外学習の実施には欠かせない。高学年児童や中学生では、4～



5人の小グループ単位で自由に活動する場も設定している。地図の見方や街での行動の仕方とも体験を通して学べる校外学習である。

## 【宿泊学習・スキー学習】



9月に宿泊学習（小5・6年 2泊3日 中全学年 3泊4日）、1月にスキー学習（小5・6年、中全学年合同 2泊3日）を行っている。両行事ともに教員（派遣教員・ドイツ語教員）がコースの計画や下見を行い、体験的活動や調べ学習ができるようにしている。



宿泊学習では「農家でのリンゴ狩り体験」、「学校博物館でのドイツ教育の歴史調べ」、「アルプス登山」などを行い、行事終了後には子どもたちが掲示資料などを作成し、宿泊学習のまとめを行う。

スキー学習は現地のインストラクターについてもらい、コース別に活動する。スキーの技能向上を目指すとともに、ドイツ語でのコミュニケーションを図る機会でもある。

## 【特別授業】



定期的ではないが、在日本国総領事館や日本人会からの紹介により著名な方が学校に訪れ、講演や音楽の演奏などを行う特別授業を実施した。私の派遣期間中には、元宇宙飛行士の毛利衛氏、地元サッカークラブチーム「バイエルンミュンヘン」のコーチ、ゲルト・ミュラー氏が来校し、授業をしていただいた。様々な

分野で活躍していらっしゃる方々の授業を直接受けることができ、子どもたちにとって将来に対する大きな夢や希望を持つことができるよい機会となっている。

## 【在外教育施設派遣で学んだこと】

在外教育施設ならではの特色ある行事や取組について例を挙げてみたが、外国で学ぶ子どもたちにとって大切なことは、まず第一に「自国のことを知る」ことだと痛感した。「確固たる日本人」として人に接することが大切である。子どもたちに言葉（日本語）をしっかりと習得させることは、我々派遣教員の使命である。将来的に、自分の考えをまとめる「柱」（様々な経験・母国語の十分な習得）がなければ、本当の交流はできない。現地の言葉を学ぶことは大切なことであるが、真のコミュニケーションを図るためには言葉だけではなく心の内面も充実させていなければならない。相手のことを理解しようと努力するとともに、自分のこともしっかりと伝えられるようにすることが必要であると感じた。

私自身、職員室ではドイツ語学習担当のドイツ人教員4人と、英会話学習担当のアメリカ人教員1人とともに勤務した。職員室にいながら「国際交流」を図ることができたのも大きな収穫であった。本校の子どもたちの教育について、「日本では」「ドイツでは」などお互いに意見交換しながら授業や行事を作り上げていくことができ、私自身、貴重な経験をすることができた。

日々の教育活動をより客観的に振り返るために、学校教育に関するアンケート【学校評価（対象：保護者、児童・生徒、教員）】を実施した。子どもを中心にして、学校教育の質を高めようとするこの試みは、今後の教育実践に大いに役立つものになった。